



学校だより

5月号

横浜市立大道小学校
令和5年4月28日



← 学校 WEB ページはこちらから

校長 加藤 和之

「絶対に残してはいけない。」

今年も、大道小に「こいのぼり」が泳ぐ季節になりました。本校では、風物詩の一つになっていますが、「こいのぼり」を上げる学校は多くはないので、何だか誇らしいような気分になります。保護者や地域の皆様の願いを受け、いきいきと活動する「大道っ子」の姿をそのまま表しているような「こいのぼり」を見ていると、「子どもたちが明るく、自分らしく輝いてほしい。」と願わずにはいられません。

「あー、おいしかった。」と、食後に思わずつぶやいてしまうほど、大道小の給食は美味しいと感じます。栄養士や調理員さんが、「子どもたちに、安全でおいしい給食を!」と、細かいところにまで気を配りながらも、ただマニュアル通りというだけでなく、いろいろと工夫をしながら調理をしているからこそ、そう感じるのでしょう。「給食」というのは不思議なもので、誰にでも「給食の思い出」があるようです。皆様は、いかがでしょうか。

私は、小学校の6年間だけでなく、先生になってからもずっと給食を食べているので、給食のお陰で(?)、元気に生きていけると言えるかもしれません。子どもの頃は、競って「おかわり」をしたものです。しかし、一つだけ苦い思い出があります。担任が、「嫌いなものでも、絶対に残してはいけない。」という先生だったことがあり、「これだけは勘弁してほしい。」と思っている野菜を無理をして食べたことです。その野菜が出る日は、朝から本当に憂鬱でした。そして、やっとの思いで、まさに流し込むように食べると、思わず涙目になったものです。その先生が担任だった2年間、それだけ頑張っても、未だにその野菜が食べられません。

「食育」という言葉があります。農林水産省によると、「食育」とは、「生きる上での基本であって、様々な経験を通じて『食』に関する知識と、『食』を選択する力を習得し、健全な食生活を実践できる人を育てる。」というものです。食品それぞれの栄養やはたらき、生産者や調理をする人の工夫や努力、食事のマナーや約束事など、様々なことを学んでいくことが大切です。学校給食は、ただ「昼食を提供する」だけでなく、そういった「生きる上での基本となる力」を育てることも大切にしています。その中の一つとして、「おいしく感じるものだけを食べる。」のではなく、「食べられるものを増やしていこう。」と、ちょっとしたチャレンジができるように支援することがあると思います。「食べず嫌い」をせずに試してみることで、少しずつ食べられるようになり、その子の「食」が広がるきっかけになるかもしれません。食べる「量」についても同様で、無理のない範囲で増やせるよう支援することで、その子の成長につながります。こうしたステップを踏んでいくことで、子どもの「食べること」に対する「見方・考え方」が変容していくものと思われます。ですから、大切なのは、やみくもに「残してはいけない。」ということではなく、コミュニケーションを図りつつ、その子自身が「頑張ってみよう。」と思えるようにすることだと思います。私のように「苦い思い出」ではなく、子どもが「これだけ食べたよ!」と笑顔になるよう、支援したいと思います。

余談ながら、私は、「絶対に残してはいけない。」と言った担任の先生が大好きでした。そして、今でも食べられない野菜は、「キュウリ」です。これからの季節、しばしば給食に出てきます。